



ICT Monthly 200号記念

感染制御部

わたしたちのICT Monthlyが200号を迎えました。1996年5月に第1号を出してから、17年間ほぼ毎月欠かさず発行してまいりました。また、中央診療部門として感染制御部が発足したのは2003年4月からですので、感染制御部としての活動もちょうど10年間を過ぎました。今回は、これまで200号のICT Monthlyに取り上げられたトピックスをひも解きながら、阪大病院の感染対策の歴史をふりかえってみたいと思います。



第1号（1996年8月）：阪大病院にICTを！

記念すべき第1号です。

このときはちょうど堺市におけるO-157食中毒が起こっているときで、「7月12日に堺市における病原性大腸菌O-157腸炎集団感染発生に最初に遭遇したのは、阪大小児科の当直医でした」という臨場感あふれる書き出しで始まる特別号外「猛威をふるうO157感染症」を併せて発行しています。

第22号（1998年5月）：新たに「感染対策部」開設 院内感染や移植医療への対応に一層の配慮

第33号（1999年4月）：心臓移植を経験して感染対策に思うこと

1999年2月に臓器移植法施行後第1例目の脳死心臓移植が阪大病院で行われ、それを受けて感染対策の重要性を解説した号となっています。

第72号（2002年7月）：生物テロと医療機関

第81号（2003年4月）：ついに「感染制御部」が発足！＜予防と治療の強化で感染症を限りなくゼロに＞

第82号（2003年5月）：SARS対策でわかったこと

2002年11月に中国南部で重症の肺炎が多発し、重症急性呼吸器症候群（SARS）と名付けられました。原因が新種のコロナウイルスと判明したのが2003年4月。5月には感染した台湾人の医師が近畿地方を観光で訪れていました。幸い日本での感染症の発症はみられませんでした。2004年5月にWHOが終息宣言を出すまでに、世界で8096人が罹患し、774人が死亡しました。このとき、阪大病院でも玄関のすぐ横に陰圧の「感染制御外来」が設置されました。

第98号（2004年9月）：多剤耐性緑膿菌のアウトブレイクに対する感染制御部の対応

この年の6月に多剤耐性緑膿菌（MDRP）のアウトブレイクが起こり、9名の患者さんから分離され、3名の患者さんが亡くなられ、うち1名はMDRPによる肺炎で亡くなりました。阪大病院ではすぐにこの事例を公表し、第三者委員会を立ち上げ、透明性をもって説明と対策を行いました。この方式は以降の全国の大学病院の院内感染アウトブレイク発生時のモデルケースとなりました。

第134号（2007年9月）：多剤耐性緑膿菌による院内感染事例の報告

再び、MDRPによるアウトブレイクが発生し、患者さん4名に同一の遺伝子型のMDRPによる感染が発生しました。このことを契機に、内視鏡洗浄のセンター化を実現し、以降、MDRPの分離は激減しました。

第158号（2009年9月）：新型インフルエンザ（A/H1N1）の現状と診療体制

記憶に新しい、2009年の新型インフルエンザです。幸い病原性が強くなく、日本では重篤な症状になられる患者さんは少なかったのですが、学校の休校による経済損失や風評被害など、多くの教訓を残したパンデミックでした。阪大病院でも外来棟3階にワクチン外来を設置いたしました。

ICT Monthly の200号の歴史をふり返ると、O-157、臓器移植、バイオテロ、院内感染アウトブレイク、新型インフルエンザなど阪大病院のみならず、日本の院内感染対策の歴史が凝縮されているのがわかります。たくさんの方の経験を経て、充実する院内感染対策の更なる発展をめざし、患者さんの安全を第一として、これからも職員のみならずと一緒歩んでいこうと思います。今後とも一層の御支援、御協力をお願いいたします。